

では、また来週の日まで。おやすみなさい。

## 第六話 考える葦

もう一羽、もう一羽だけと思ったのがまちがいのもとでした。私の腰には予想以上の獲物がすでにぶらさがっていましたのに、欲というものは恐ろしいもので、目の前に飛び立った一羽の山鳩の羽ばたきの音を耳にした途端、矢も盾もたまらなくなりました。銃を構えて、そっと、やぶの茂みに一歩踏み込みました。獲物を捕えれば、すぐにでも元の道にとって返すことはそうさもないことでした。無意識の中にも、元の道へ出る方角だけは頭の中で確保しているつもりでした。だが、それから、ものの二十分も、一羽の山鳩を追っかけて、すっかり夢中になり、とうとう最後に獲物を仕留めて、私のほおに浮かんだ快心の微笑は、しかし次の瞬間にヒヤリと凍りついてしまいました。私は忙しく、頭の中で、道からそれてからの私の行動を思いめぐらしてみました。わからなくなったのです。全然見当がつかないし、何の目印もありません。が、ボンヤリしていてもしょうのないこと、私は意を決して、身の丈ほどもある笹藪をかき分け、一直線に進んで行きました。やぶは深くなるばかりです。もしかして反対の方角だったら……私はゾッと

て、もう一度、さきほど獲物を捕えた所に戻ろうとしましたが、今度は、それさえもわからなくなりまして。私はあせりました。すでに日没が迫っていました。こんな所で真暗な夜がやって来たら……そして性の悪い獣にでも襲われたら……犬も連れられない気軽なひとり狩の軽卒が悔まれましたが、今更どうなるものでもありません。次第次第に暮れ行く山の鬼気に身震いし、次から次へと浮かぶ妄想を払いのけながら、必死になって、笹藪の迷路をはいまわりました。どうしよう……不安と疲労とで、心臓が早鐘のように打っている私の胸をかきむしり、私は、オーイと叫んでみましたが、が、それに答えるものは、四方から響き返ってくる無気味な山彦ばかり……暗い絶望が、私を不安のドン底につき落としました……と、皆様、いかにも深刻に描写してみました、実は、山登りがあまり好きでなくまだ一度も山路にふみ迷った覚えもなければ、銃で雀一羽殺したこともない私です。幸いにも、そんな経験はないのですが、もし、そんなことがあれば、どのような気持ちがるだろうと、ちょっと想像をたくましくしてみたに過ぎません。が、想像しただけでも、ゾッとするような無気味さを感じますね。

ところで、皆様は、そのような経験をお持ちでしょうか？ 道に迷ったなどということは、あまり自慢ならぬことです。経験がなければそれに越したことはありませんが、しかし、狩

をする獲物は必ずしもキジや山鳩ばかりとは限らないようです。

もう毎日の暮らしを立てるには充分過ぎるほど持っているながら、もう少しもうけたいと夢中になって狂奔するお金もうけというものも、真に魅力のある獲物ではないでしょうか？

世の中には事業家といわれる人がたくさんいます。一つ、また一つと、事業を拡張していくおもしろさ。もちろん、これらの事業そのものは世のため、人のために役立っていきましょうが、その人々の心を引きつけるのは、世のため、人のためになっているというよりは、人に先んじて機敏に立ち回り、腕のさえ、頭のさえを見せて、もののみごとく事業の手を押し広げて行く男らしい壮快さだけなのですね。そのためには、義理や人情をあまり考へてはいけません。ただ、自分の心を夢中にさせる事業欲、これもりっぱな獲物だと思いませんか？

それから、これは少し言いがたいことですが、そういう人々にとって「女」というものも、追いかけるに値する獲物だと言え、少し言い過ぎでしょうか？

とにかく、獲物はたくさんあります。そして前後を顧みず、義理も人情も踏みにじって、ただ獲物を追いまわす醍醐味……けれど、皆様、一度立ち止まってください。そして、あなたの周囲を見まわしてください。あなたは、今、この貴重な人生という旅路、山路のどこにおられるのでしょうか？ あなたの人生の行手は、いいえ、二度と再び、やり直しのきかないあなたの貴重

な人生の目的は、いったい何だったのでしょうか？ あなたの人生もようやく暮れはじめようとして、いるきょうこのごろです。こうして、次から次へと暗雲に富や快樂を追いかけて、そして、それが、それで、どうなるというのか？ あなたは考えたことがありでしようか？

それとも、そんなことを考える暇はなかった。ちょうど、あの石川達三の小説の主人公、西村某という男のように、そこはかとなく学校を出て、何ということもなく結婚生活に入り、やがてひとりの子供が生まれると、その妻と子供に追いついてられるように毎日毎日弁当をもって会社に出かけ、地味な平凡な人柄が買われたのか年と共に地位も昇っていったものの、フト気がつく、もう五十の年に手が届こうとしていました。何の波瀾もなく、何の冒険もなく、そうかといって、心の浮き立つような激しい恋愛の思い出もなく、夢のように過ぎて行ったおのが青春が今更のようによくやしく、まだ情熱の炎が全く消え失せてしまわぬうちに、せめて今生の思い出に激しく美しい恋愛に身も心も焦してみたいものと、フト知り初めた十八才の少女の肉体に今まで生きて来た平凡な人生に対する最後の抵抗を試みますが、それが拒まれた瞬間、かき立てた情熱の炎も消え失せるのを感じ、夜具に顔を埋めて、サメザメと人生の悲哀に泣く四十八才の男……のように、今まで生きて来た過去の生命の無意味さに、今更のように愕然となさることはありませんか？

皆様、フランスの哲人パスカルは、あのパンセの中で「人間とは考える葦である。」と申しています。川辺に生い茂り、風のまにまにそよぐ葦草……確かに人間は外目にはみじめな一本の葦のような存在であります。人間は、しかし、人間をただの葦から隔てるものを……いいえ、それどころか他のいかなる存在……そうです、どんなに精巧無比な機械からも人間を隔てるものを……言い換えれば、人間にしかない独自の偉大さを持っているのです。それは「考える」という力があります。人間は考えます。考えるからこそ私たちは人間なのであり、そこに、人間の、最も人間らしい生命の営みがあるのです。

こう言いますと、皆様はきつと、「もちろん私たちは考えているさ。商売一つにしたって考えないでできるものじゃない。ましていわんや知的な仕事、学校の教師、医者、技術家、どれを取っても考えないでできる仕事など一つもあるわけはないではないか。」と、おっしゃるかもしれませんね。もちろん、それに違いありませんが、パスカルが、人間を、考える葦だと言ったときの「考える」とは、そういう意味の考えではなかったのです。

ある哲学者は、「人間とは『なぜ？』と問う動物である。」と申しました。子供がようやく物心つく、母の背にいながら、すでに「あれは何？」「どうしてなの？」「それからどうなるの？」とやつぎばやに質問を浴びせて来ますね。この、執拗な「なぜ？」を繰り返しながら、物事の原

因とその目的とを追求していくところに、人間理知の輝きがあり、止まることを知らぬ科学の進歩があるのです。けれど、次から次へと奔流のように出て来る「なぜ？」という質問の中に、一番重要な、一番根本的なものがあります。このたった一つの「なぜ？」に解答を与えないなら、たとえ全宇宙の神秘を知り尽くしても何の益にも立たぬほど、深刻な重要なことなのです。そして、このことは、皆様のひとりひとりが必ずや、いつか一度は自分自身に「なぜ？」と問いかけてごらんになったに違いないほど、必然的なものなのです。その一つの問題というのは、「私はなぜ生きていますのか？」という問題であります。この「なぜ？」にはきわめて深い問題が含まれています。毎日生きていますが、生きていきたい、どうなるのでしょうか？ いつまでもこの世に生きておられないことは確かですし、来る日も来る日も、あくせくと働いているうちに、日に日に年老いて来ます。だが、いったい、何のために？……ああ皆様、これこそパスカルが言った「考える」ということ、川辺の葦のような私たち人間のひとりひとりが考えねばならぬ問題なのです。

そんなめんどうなことは、よほどの暇人か、それとも哲学者にまかせておけばよいと言っはいけないのです。それは、だれの問題でもない、あなた自身の問題、私たちのひとりひとりの切実な問題なのですから。

人生という旅路に、自分がどこから来てどこへ行くのかも知らぬ暗黒の山路をさまよいつつ、一度しか与えられぬ私たちの、人生という貴重な存在を無意味に浪費したくないなら、「なぜ生きていますのか？」というこの「なぜ？」をゆるがせにはいけないのです。

皆様、早くもきょうの一日が終わろうとしています。生きることの苦しさ、私たちから、物事を深く考えるという力を根こそぎ奪い去ってしまいます。何も考えないで、ただ、あくせくと、生命の糧を追う生活、きのうもきょうも、そしてあしたも同じような日が続くことでしょう。考える力も失せて、ただ生活の惰性に押し流されて生きる生命が続きます。けれど、皆様、考えるということ、静かに、物思うということは必要なことなのです。勇気を出しましょう。そして、勇敢に、思い切って、この「なぜ？」を私たち自身の心に問いかけましょう。解答が与えられるまで忍耐強くこの一語を、胸の奥にささやき続けてまいりましょう。

「なぜ？ なぜ、私たちは生きていますのか？」と。  
では皆様、おやすみなさい。